



TITLE:

結末から読み直す『大いなる遺産』

AUTHOR(S):

村上, 幸大郎

CITATION:

村上, 幸大郎. 結末から読み直す『大いなる遺産』 . Zephyr 2010, 23: 52-71

ISSUE DATE:

2010-12-24

URL:

<https://doi.org/10.14989/139081>

RIGHT:

結末から読み直す『大いなる遺産』

村上 幸太郎

序

チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens)の『大いなる遺産』(*Great Expectations*)の結末は、もともと彼の準備していたものではない。現在批評の際にファースト・エンディングと呼ばれている、当初の結末は、海外から久々に帰国した主人公のピップが、ピカデリーでエステラと束の間の再会を果たして終わるというものであった。この結末では、夫のドラムルの死後エステラは再婚しており、ゆえにピップと結ばれる可能性は残されていない。しかし、ピップを「孤独な男のままにしておく」(Forster, 289)ことに反対したブルワー＝リットン(Edward Bulwer Lytton)の説得に応じて、ディケンズが最終章の一部を書き換えたものが、いわゆる現行のセカンド・エンディングである。ジョン・フォースター(John Forster)の『ディケンズの生涯』(*The Life of Charles Dickens*)の中でこのいきさつが明らかにされて以来、2人の結婚を受容できるかという問題については古くから議論がなされてきた点の一つであるが、書き換えられた結末の方もハッピー・エンドとは言い難い。ディケンズは最後の部分を次のように締めくくっている。

「…私は折り曲げられ、打ち砕かれてしまいました、でも—そう願っているのですが—もっと良い形に。どうか、昔みたいに、思いやり深く、優しくして下さい。そして私たちは友達だとおっしゃって下さい。」

「僕たちは友達だよ」と言って、彼女がベンチから立ち上がる

と私も立ち上がって彼女に身をかがめた。

「そして、離れていても友達でいましょう。」と彼女は言った。

私は彼女の手を取って、廃墟となった屋敷跡を出た。ずっと昔、私が初めて鍛冶場を後にした時に朝霧が晴れかけていたように、今は夕霧が晴れかけていた。そして、広々と広がる穏やかな光のうちには、彼女との別れの影は見えなかった¹。(358)

確かに、霧が晴れ上がり、廃墟となったサティス・ハウスを後にするという描写は、二人の再出発を示唆しているようであり、最後のピップの「別れの影は見えなかった」(I saw the shadow of no parting from her.)という確信は、エステラとの将来的な結婚を表しているように感じられる²。しかし、ピップのこの「期待」とは裏腹に、エステラの最後の言葉は「離れていても友達でいましょう」(And will continue friends apart.)であり、彼女がピップに感じているものは友情であることがはっきりと示されている。このように、ハッピー・エンドにするように促されて書き直したと思われるセカンド・エンディングは、ピップの「期待」が全面に示されているだけで、2人のその後の結婚は考えにくいと今日では解釈されることが多い。マイケル・スレイター(Michael Slater)の言うように、ディケンズはハッピー・エンドを期待する者にはそのような読み方ができる一方、注意深く読めばピップとエステラの別離が読み取れるような結末を描い

¹ 本稿での *Great Expectations* からの引用は、山西英一による翻訳（『大いなる遺産』新潮社、1996 年）を参照し、必要があれば適宜変更を加える。ただし、引用のページ番号はすべて末尾に示した Norton 版による。

² Norton 版ではこのようになっているが、後にディケンズは最後の文を“I saw no shadow of another parting from her.”と書き換えている。意味するところはほぼ同じであるが、「影が見えない」ということが強調されていることによって、よりピップの確信が伝わるように書き換えられているように思われる。

たとえるのが、最も妥当だと言えるだろう(Slater, 495)。

一方で、この終わり方によって語り手の位置づけは問題になってくる。リットン男爵のようなハッピー・エンドを求める読者を満足させつつ、その実二人の別離を描くことがディケンズの意図であったとすれば、当然最後に語り手が現在の境遇を語るわけにはいかない。しかし、ピップとエステラのその後が明らかにされないことを、ディケンズの問題ではなく、語り手であるピップの問題として考えると、なぜすべてを知っているはずの語り手がエステラとのその後という、後の自分を形成する上で大きな分岐点であったはずのことを語らないのか、また、語り手は現在どのような状態にあるのか、という疑問は当然浮かんでくる。マーティン・マイゼル(Martin Meisel)やピーター・ブルックス(Peter Brooks)のように、最後の場面を前にしてピップの成長物語は終わっているとして、結末部をさほど重要視しない批評家もいるが³、儚く破れたと思われるピップの最後の期待を、語り手があたかも叶えられたかのように描いていることは、この小説の中で語られる、ピップの成長そのものを疑問視させるものではないかと思われる。そこで、本論では、作品全体を通して語り手ピップが示そうとする「成長」した自分の姿についての問題について考えてみたいと思う。

I

まずは、結末の問題をもう少し掘り下げ、ピップがエステラとの結婚を期待することの問題点について考えてみたい。

³ マイゼルは、帰国したピップが故郷に戻り、そこにピップと名付けられたジョーとビディがいるのを発見した場面こそが真のエンディングであり、残りの部分はあと書き(postscript)にすぎないとしている(Meisel, 327)。また、ブルックスは、ピップとエステラとの新たなロマンスのようなものは、別の物語に属するべきものであるとしている(Brooks, 138)。

『デイヴィッド・コパフィールド』(*David Copperfield*)のデイヴィッドと異なり、語り手のピップは自伝を執筆している現在の境遇を語ることはない⁴。語られない以上、彼は今でも小説の最後で示されるクラリカー商会の共同経営者であると推測するしかないが、そこで得た「成功」について、語り手は控えめな達成感を口にする。

私たちが大商会であるとか、巨万の富を得たとか、そんな風に思っ
てはいけない。私たちは大規模な仕事はしていなかったが、評判が良くて、利潤のために仕事をし、利潤もあがり、非常にうまくいった。(355)

デイヴィッド・パロイシアン(*David Paroissien*)の指摘するように、成功したことそのものではなく、仕事に対するひたむきさを強調している点で、この部分は『デイヴィッド・コパフィールド』における語り手デイヴィッドが、自らの“golden rules”(DC, 512)と呼んでいる、セルフ・ヘルプ的な考え方を述べているところを想起させるものである(*Paroissien*, 415)⁵。「出世をするために自分では何もしてこなかった」(190)ピップが、労働に対するひたむきさを身につけることで、間違った期待や夢に翻弄されてはならないという教訓を得ていることが表されていると言えよう。

しかし、セカンド・エンディングにおいては、自分の現在の環境に満足している記述はこの直後に早くも揺るぎ始める。結末の変更

⁴ *David Copperfield* では、“O Agnes, O my soul, so may thy face be by me when I close my life indeed, so may I . . . still find thee near me, pointing upward!” (DC, 737) と現在形で終わっていて、主人公のデイヴィッドが成長して現在の語り手になったことがはっきり分かる。

⁵ 具体的には、“there is no substitute for thorough-going, and sincere earnestness. Never to put one hand to anything, on which I could throw my whole self; and never to affect depreciation of my work, whatever it was; I find, now, to have been my golden-rules.” (DC, 512) というものである。

が行われる直前のビディとの会話の中で、結婚しないのかという質問をされ、エステラのことをほのめかされたピップは次のように言っている。

「ねえビディ、僕は自分の人生の中で、一番大切な場所を占めたものは何一つ忘れないよ。…だけど、僕がかつてそう呼んでいたあの哀れな夢(*poor dream*)は、すっかり過ぎ去ってしまったよ。ビディ、すっかり過ぎ去ってしまったんだ！」(356)

エステラへの気持ちを「かつて哀れな夢と呼んでいたもの」(*that poor dream I used to call it*)と表現することで、ピップは現在の自分がかつての自分とは違うということを強調しているが、肝心のエステラのことを思い悩んだりしないのかというビディの質問に対する返答は、もともとの「それは間違いないよ」(*I am sure and certain*)という、確信に満ちたものから、セカンド・エンディングでは、その後の展開に合わせて「いや—そんなことはないと思うよ、ビディ」(356)という、ためらいを感じさせるものに書き換えられ、本心は彼女への未練を引きずっていることが窺われるように描かれている。

その後「エステラのために」(*For Estella's sake*; 356)、サティス・ハウスを訪れたピップは、偶然彼女と再会し、彼女には「かつての高慢だった瞳の、今は悲しみに和らいだ光」と「かつては無感覚だった手の、親しげな感触」があったと述べている。読み手に彼女の変化を印象付ける記述であるが、同時に彼女は「えも言われぬ威厳と、えも言われぬ魅力」(*its indescribable majesty and its indescribable charm*)をなお有していたと、かつてエステラを惹きつけていた彼女の魅力に関しても、かなり強調して描かれている。*indescribable* という、大げさとも言えるような形容詞が繰り返して用いられていることによ

って、ピップはここでエステラの心の変化だけではなく、その美しさにも再び魅了されているように感じられる⁶。

さらに、しばらく会話を交わした後、ピップは彼女の声が「さまよう者(wanderer)にとっては胸をつかれるような声」だと思う。ここでピップは自分のことを wanderer と言っているわけであるが、この wander という言葉は他の場面でもしばしば印象的に用いられるものである。例えばエステラの住む家の周りに甲斐もなく通っていた自分について、語り手は「私の魂はあの家の周りをさまよい(wandering)、さまよい、さまよい続けていたのであった」(227)と、殊更に wander を強調して回想している。また、ビディと結婚しようと故郷に戻ってきたピップは、まるで自分が「何年もさまよい(wandering)続けたあげく、遠い旅路から、裸足のまま、とぼとぼと家に帰っていく者」(353)のようにと感じている。「さまよう」ことはピップの空虚に過ごしたロンドン時代の生活をそのまま表すものでもあると言えよう。そのため、wander という言葉はそのような生活から抜け出し、勤勉努力によって確固たる地位を確立したこの時点でのピップが自らに対して用いるべき言葉ではない。このようにして徐々にエステラと再会したことによるピップの動揺が窺えてくる。

ピップのエステラへの思いはより明確なものになっていき、「私、あなたのことを度々思ってきたわ」(357)とエステラが自分のことを気に掛けていたことを知ると、ピップは「君はいつも僕の胸の中でも大切なものでした」(358)と言う。さらに、サティス・ハウスに別れを告げに来た時に、彼にも会えて別れを告げることができて嬉しいという彼女の言葉を聞くと、「僕にとっては、別れることは辛いものだよ。あの僕たちの最後の別れの記憶は、僕にとって今までずっと

⁶ ちなみに、この“indescribable charm”という言葉は、草稿の段階ではなかったものである。エドガー・ローゼンバーグ(Edgar Rosenberg)も同様に、この言葉の付け足しを問題としている(Rosenberg, 446)。

と辛いものだったんだよ」とはっきりと彼女への思いを引きずっていることを口にする。このようにエステラからはピップへの恋愛感情は伝わってこないにもかかわらず、辛いドラムルとの結婚生活から教訓を得て精神的に成長した彼女は、自分と心を通い合わせ、愛してくれるはずだと思ったピップは、彼女とのその後の結婚を確信し、既に述べたように「離れていても友達でいましょう」という彼女の言葉に耳も貸さずに「別れの影は見えなかった」と確信するのである。

ピップがエステラの言葉を見做して勝手に期待を抱く場面は以前にもある。莫大な遺産相続の見込みを得た後、サティス・ハウスで美しく成長したエステラにピップは魅了されるが、彼女は自分には「心がない」(183)と言って、次のような警告をピップに与える。

「私、まじめに言っているのよ」と、エステラは顔をしかめるというよりも（なぜなら、彼女の額はなめらかだったから）顔を曇らせながら言った。「もし私たちがこれからもっと一緒にいることになるのであれば、あなたはそれをいまずぐ信じなさい方がいいのよ。いいえ！」と、彼女は私が口を開こうとするのを命令するように制して言った。「私は優しい気持なんかどこにも持っていないのよ。そんなもの、私一度も持ったことがないの」(183)

心がないのだから、自分はピップを愛することはないとここでエステラは言っているのであるが、ピップは「もし君のいま言ったことを信じるのなら、僕は驚いただろう」と、彼女の言葉を真に受けず、彼女を愛することは「崇高で偉大な情熱」(187)と思い込んでいる。また、ピップの恩恵者がマグウィッチであることが発覚する前の章においても彼女は彼に同様の警告を与えているが、ここでもピップ

はそれを理解しようとはしない。エステラの言うことに耳を貸さずに盲目的な愛情を抱き、勝手に彼女が自分に「運命づけられている」(187)と思い込んだことは、ピップの大きな過ちだったはずである。そのためこれらの場面と同じように、結末においてもピップが別れを口にするエステラの言葉を無視して一方的に彼女との結婚を夢見始めていることは、大きな問題であるように思われるのである。

ピップとエステラの結婚を期待する批評家は、彼が精神的に成長していることを前提として論じている⁷。彼女を赦し、かつてとは異なる形で彼女を愛する気持ちが芽生えているのであれば、それはそれでピップの精神的成長を読みとることは可能であろう。しかし、今まで見てきたように、エステラの姿を見たピップは、「夢想家の少年」(a visionary boy; 272)とかつて彼女に呼ばれた頃の自分に戻ってしまっている。結末における問題は、ピップがエステラとの結婚を期待していることそのものではなく、彼がかつてと同じような愛情を彼女に対して抱き、「哀れな夢」(poor dream)を再び抱き始めていることなのである。

このように、結局再びエステラに魅了されてしまうピップを見ていくと、小説の主題であるはずの彼の成長とは何だったのかという疑問が浮かんでくる。ジェローム・ハミルトン・バックリー(Jerome Hamilton Buckley)は、「小説全体のロジックは、ピップが他の間違った期待とともに、エステラをあきらめることを要求している」と指摘し(Buckley, 61)、ディケンズが結末を書き換えたことを嘆いている。教養小説としての「ロジック」を考えれば、バックリーの主張は正しい。ピップの間違った期待の中心にあったものはエステラであり、当然彼女を「完璧な人間」(179)と思いこんで熱烈に愛した結果ジョ

⁷ 例えば、Q. D. リーヴィス (Q. D. Leavis)は、“She [Estella] has gone through Pip’s self-knowledge and humiliation so that they can truly together.” と指摘し、結末を“the successful end of Pip’s pilgrimage” (Leavis, 330)としている。

一やビディの価値観を共有できなくなった彼の未熟な心は正されねばならないはずである。しかし、マグウィッチが恩恵者であることが発覚して以降の物語の展開では、本当にピップの完全な成長が描かれているのだろうか。アニー・サドラン(Anny Sadrin)は、セカンド・エンディングはピップの人生の物語についての我々の今までの読み方を疑わせる(Sadrin, 178)ものだと指摘しているが、彼女の言うようにセカンド・エンディングは、教養小説的な、主人公の精神的成長を扱った小説としてこの物語を捉えることを見直すきっかけを与えるのである。

II

前項で見た、ピップが結末において再び夢を見始めることを念頭に置いて、次に小説の中でエステラがどのように描かれているのかについて考えてみたい。第3部で描かれる彼の成長過程、および語りの中に、結末のピップに繋がる要素があるとすれば、セカンド・エンディングにおけるピップの姿は決して唐突なものではないと言えるだろう。

この小説の第3部においては、謎めいていたピップをめぐる人間関係が次々に明らかになり、プロットは急展開を見せる。その中でもピップにとって大きな意味合いを持つものは、エステラがマグウィッチと、ジャガーズの家政婦であり、実は殺人犯であるモリーの娘であったという事実である。この展開は、ピップの上流階級への憧れがいかに虚しいものであったかを示す極めつけの皮肉と言えるだろう。しかし、ピップ自身はエステラの素性を知ったことによって幻滅を覚えるわけではない。むしろ、彼女がマグウィッチの父親であることを知ることによって、ピップは彼との関わりに積極的な態度を持ち始めるように思われる。

エステラの素性の秘密について探り当てるのはピップ自身である。以前から彼女の表情や手に、どこか不思議な既視感を覚えていたピップは、彼女の結婚後にジャガーズの家を訪れた際、そこにいるモリーを見て、「彼女の手はエステラの手であり、彼女の眼差しはエステラの眼差しであった。たとえ彼女がさらに百遍も姿を現したとしても、私の信念が正しいという確信は、これ以上にも、これ以下にもなりはしなかっただろう」(292)と、モリーこそがエステラの母親であることを直感する。その確証を得るために、モリーがジャガーズの家政婦となるまでのいきさつを彼の事務員であるウェミックから聞き出し、彼女には娘がいたことを知る。そしてその後マグウィッチがハーバートに話した内容に、ウェミックの話と共通することがあることに気づき、マグウィッチがエステラの父親であることを確信する。このような俄かには信じがたい因果関係の連なりによって、ドラムルと結婚したことによって完全に断たれてしまったように思われたピップとエステラとの関係が、再び繋がってくるのである。

ピップは何としてでもエステラの素性を突き止めなくてはならないという、「熱狂的な信念」(feverish conviction)に駆られ、サティス・ハウスの火事で負った火傷の痛みを押してまで自分の推理の真偽を確かめにジャガーズを訪ねるが、自分がなぜこれほどまで執拗に彼女の素性に追いつけていたのかということについて、語り手は次のように推察している。

エステラの素性を追ったり、探ったりすることに躍起になっていた時に、自分が一体どんな目的を持っていたのか、私には分からない。…このことをエステラのためにやっていると感じていたのか、それとも自分がその身の安全を非常に気に掛けている男

(マグウィッチ) に対して、彼女をずっと長い間包み込んでいたロマンティックな関心(romantic interest)という光明を、いくらかでも移せることを嬉しく思っていたのか、本当に分からない。おそらく、後者の方がより真実に近いのであろう。(303-4)

ここで言われる「ロマンティックな関心」は、ピップが正式にジョーの徒弟となり、上流階級への夢が断たれてしまった場面においても、自分は「あたかも分厚いカーテンが自分の生涯のいっさいの興味やロマンス(interest and romance)に垂れこめたように」(87)絶望したということを語った際にも用いられている。そのため、この言葉はエステラへの憧れと読み替えてもよいものであろう。この「興味やロマンス」はピップに道を誤らせたものであるが、ここではそのロマンスこそが、ピップに嫌悪感を抱くマグウィッチと共に国外に逃亡するという行為に積極的な動機づけを与えているのである。このように、「自己犠牲」(Miller, 276)、「忠実な愛情」(Ricks, 208)などと表現されることの多いマグウィッチに対するピップの献身には、その根底には「マグウィッチはエステラの父親だから」という意識があるように思われる。サティス・ハウスで別れて以降、結末までエステラは登場しない。しかし、「君は僕の一部で在り続けざるをえない」(272)とピップ自身が口にしている通り、その後もエステラは彼に影響を与え続けているのである。

しかし語り手は、こういった当時の自分と、現在の自分との心理的な距離を非常に強調しているように思われる。先に挙げた「ロマンティックな関心」に関する部分において、語り手は「自分には分からない」と2度繰り返した上で触れられたものであり、また、「後者の方がより真実に近いのであろう」という言い方もどこか他人事のような響きがある。さらに、語り手はこの直後に「いずれにせよ」

(Any way)と次の段落に移り、今までの話が脱線であったかのように回想を終えている。エステラに対するかつての感情について、語り手が「分からない」と言う箇所はここだけではない。サティス・ハウスでのエステラとの別離の場面において、ピップは彼女に熱烈な別れの言葉を告げるが、語り手は「私がどんなに不幸の恍惚を感じて、これらの言葉を途切れ途切れに言ったのか、私には分からない。熱に浮かされたような支離滅裂な言葉は、まるで体の内側の傷口から湧き上がる血のようにほとばしったのであった。」(272)と回想している。また、この場面の後、エステラが結婚したことをはっきり知りたくないピップは、自分に新聞を見せないようにハーバートに頼む。既に本人からドラムルとの結婚の話を聞いたにもにかかわらず矛盾した行動を取る自分についても、語り手は「引き裂かれ、風に飛ばされた、このみじめな小さい希望のぼろ切れを、なぜ自分は胸に秘めていたのか、それがどうして私に分かろうか！」(285)と動揺を露わにして語っている。このように、エステラの結婚を知って以降のピップが感じる未練についての記述には、たびたび語り手による「分からない」、「どうして分かろうか」などといった言葉が繰り返され、当時の自分の感情が現在の自分にとってはいかに不可解なものであるかということを何度も強調しているのである。

こういった「分からない」という語りを、逆に語り手がエステラへの気持ちについてはっきり「分かっていた」と語る部分と比べてみよう。美しく成長した彼女と再会する章において、「一度だけ言うが」と、自分の真情を語ることをはっきり宣言した上で、語り手は当時のエステラへの思いについて赤裸々に告白している。

…一度だけ白状するが、悲しいかな、私は彼女が抗し難いからこそ彼女を愛したのである。私は理性に背き、将来の見込みに背き、

心の平和に背き、希望に背き、幸福に背き、起こりうる一切の失望に背いて彼女を愛していたということを、いつもとは言わないが、実にしばしば分かっていたのである。一度だけ白状するが、私はそのことが分かっていたにもかかわらず彼女を愛しており、まるで彼女を完璧な人間だと信じていたかのように、分かっていたからといって私は気持ちを抑えることはできなかったのである。(179)

ここで語り手は、頭ではみじめな思いをすることが分かっているながらも、「理性に背き」彼女に惹かれてしまったことをはっきり語っている。考えてみると、ドラムルとの結婚によりエステラと結ばれることが絶望的になったことが分かっているにもかかわらず、彼女の父親、しかも彼女はその存在を知らない人物であるマグウィッチを助けることで彼女との繋がりを見出そうとする行為は理性に背いたもの以外の何物でもない。そのため、この引用部分に見られるようなエステラに対して抱く感情の性質を認識し、言葉にできる語り手が、夢破れてなお彼女を諦めきれない当時の自分の心境が「分からない」ことはないように思われる。

また、小説の第3部においては、語り手は現在の心境と当時の自分のそれとを切り離そうとしているだけでなく、エステラに対するピップの心情に対するコメントそのものを控えている場面もある。ピップがエステラのことを考えていることがはっきり分かる場面は二つある。一つ目は、偽の手紙でオーリックに水車小屋に呼び出される場面、二つ目はマグウィッチの死の場面であるが、オーリックの罠にかかり、死の危機に瀕したピップは、自分がここで死ねば「エステラの父親は、私が彼を見捨てたと思うだろう」(316)と心配し、マグウィッチのことを気に掛けているが、ここで注目すべきは、ピ

ップが彼のことをマグウィッチとしてでも、彼の偽名のプロヴィスとしてでもなく、「エステラの父親」として考えていることである。そして、さらにピップの想像は膨れ上がり、「エステラの子供たち、そしてまたその子供たち」(317)に軽蔑されるであろうという不安を抱いている。先に触れたように、エステラは自分の父親の存在を知らないわけであり、そのため彼女の子孫からの軽蔑というのは不思議な連想のように思われるが、語り手は「頭があまりにも早く回転していたので」(317)そのようなことを考えたと述べるだけで、なぜこの場で自分が彼女のことを気に掛けていたのか説明しようとはしない。

また、マグウィッチの死の場面においても、ピップはエステラのことにつれ、「彼女は生きています。彼女は貴婦人でとても美しい。そして僕は彼女を愛しています！」(342)と打ち明ける。これは自分と彼女の将来的な結婚を示唆することで、マグウィッチを幸せな気持ちで死なせようとするピップの嘘だとも考えられるが、今までのエステラを容易に諦めきれないピップの心情を考えると、この言葉は彼の本音だとも考えられる。ここでピップが本音を語っているとすると、この言葉はスタンリー・フリードマン(Stanley Friedman)の指摘するように、この場面の前からピップが密かに思い描いている「ぼんやりとした何か」(vague something; 335)、つまりビディと結婚したいという願望の誠実さを疑わせるものだと言える(Friedman, 412)。そのように考えると、このピップの告白は彼の精神的な成長をも疑問視させるものだと言えるが、ここでも語り手の回想はなく、読者はピップがどのような気持ちでエステラのことをマグウィッチに告げているのかはつきりと窺い知ることはできない。

語り手がエステラに対する当時の心情について「分からない」と繰り返したり、あるいは述懐そのものを控えていたり

していることを考えると、そこには何か意図があると考えられる。そこで、語り手ピップが自伝を通して描こうとする自らの姿について考えてみたい。先ほど触れたオーリックと対峙する場面において、語り手は、迫りくる死よりも断然恐ろしいものは、「誤解されて記憶されること」(being misremembered after death; 317)だと回想している。ジョン・O・ジョーダン(John O. Jordan)の言うように、この時に感じた恐怖を、語り手は今も感じているように思われる(Jordan, 82)。作家として成功し、「家庭の天使」の典型とも言えるアグネスと結ばれるデイヴィッドに対して、ピップの紳士になりたいという希望は叶わず、熱烈に愛したエステラと結ばれることもなく、かつジョーやビディの元に戻ることもできない。G. K. チェスタトン(G. K. Chesterton)の言うように、『大いなる遺産』はそのタイトルにもかかわらず、ディケンズの作品の中で唯一主人公の期待が叶わない物語である(Chesterton, 200)。それだけに、結果だけを見れば「明らかに成功していない」(Meckier, 539)と見られがちな自分の人生について、過去の過ちを認識し、そこから教訓を学んで精神的に成長した人物として現在の自己を肯定することは語り手にとって切実な問題であり、彼を自伝の執筆へと駆り立てた動機であろう。

そのため、かつての間違った期待を抱いていた頃の自分に対する語り手の口調は手厳しい。正式にジョーの徒弟となり、紳士になる夢が潰えてしまったことを嘆いていたことに対し、語り手は、「そのことには極悪な忘恩が潜んでいて、それに対する懲罰は因果応報で、当然の報いであるかもしれない」(86)と自らの忘恩の罪を責めている。また、遺産相続の

見込みを得てロンドンに移った後、自分を訪ねてきたジョーをハーバートに紹介することを恥じて、彼に気まずい思いをさせたことを、語り手は「これはみんな自分のせいであって、もし自分がジョーに対して気楽になれたら、ジョーは自分に対してもっと気楽になれたろうと悟ることができるほど、私には分別もなければ、良い感情もなかった」(172)と回想し、ジョーへの不実を後悔する。こういった批判的な語りは随所に見られるが、ピップが誤った価値観を抱くようになったきっかけは、先ほども触れたようにエステラの影響である。少年時代に彼女に自分の分厚い靴や粗い手のことを馬鹿にされ、自分や自分を取り巻く境遇を初めて恥じた時のことを恥じるようになったことを、語り手は「私に対する彼女の軽蔑はあまりにも激しかったので、それが私にも感染したのであった」(52)と回想している。彼女の軽蔑に「感染した」(infectious)と表現することで、語り手はいかに彼女からの影響が自分にとって不可避であったかということが強調している。その後もサティス・ハウスを定期的に訪れては誤った価値観を強めていくことに対し、「こうした環境において、私はどうなったであろうか。こうした環境が私の性格にどうして影響せずにいられるだろうか」(77) とエステラの前での自分の無力を訴える。このような自分がなす術なく彼女の影響を受けたことを嘆き、批判的な語りを繰り返すことによって、語り手は彼女こそが自分が間違った期待の中心にあったことを印象付けようとしている。

一方、過去の過ちからピップが解放されていく第3部においては、サティス・ハウスでの火事での火傷や、マグウィッチと国外に渡ろうとする際のボートの転覆、そして彼の死後

襲われる高熱とそこからの目覚めといったように、再生を表すイメージが象徴的に用いられ、ピップの更生が表されていく。そして、それまでに見られるような自己に対する批判的な語り口は影を潜める。マグウィッチを積極的に助けようとするうちに次第に夢から現実へ目を向け、物語内のピップが次第に現在の自己に近づいていく過程はもはや語り手にとって批判の対象ではなく、肯定すべきものだからだと言えるだろう。

しかし、既に見てきたように、ピップの成長において最も重要な要素であるマグウィッチへの献身は、実は自分が誤ちに陥った原因であるエステラへの思いが入り混ざったものである。キャスリーン・セル(Kathleen Sell)の言うように、物語の中で語られるピップと、語り手の隠したいピップと、「二人のピップ」が内在しているのである(Sell, 208)。しかし、こうした夢を見続けている面が混在しているということは、夢から覚めて、精神的な成長を遂げていく自分を描きたい語り手としては矛盾した、理に反したことであるために、語り手は「分からない」と言って語りたがらないのではないだろうか。

このように考えて結末を改めて見直してみると、ピップが再びエステラへの夢を見始めているセカンド・エンディングは決して唐突なものではないように思われる。語り手が最後に満足感を口にしてるものの、ハーバートを頼って海外に渡って以降の自身に関しての記述は淡々としており、サドランの言うようにこの小説の中で最も「ロマンティックでない」(Sadrin, 161)部分だと言えるだろう。結婚生活の「苦しみはミス・ハヴィンシャムの教えよりも強く、私の気持ちたちがどんなものであったかをエステラに分からせた」(359)ことを

嬉しく思ったところで終わるオリジナル・エンディングでは、この流れのままピップの自伝の幕は閉じられる。自分の気持ちを“what my heart used to be”と、この時の自分の心情と切り離して考えることができるピップがかつての彼女への気持ちを甦らせることはない。

しかし、セカンド・エンディングでは語り手によって抑えつけられていた夢見るピップとしての側面が表出している。エステラとの結婚という、叶わないと思われる期待を再び抱いたまま終わるこの結末によって、語り手は示したい自己像と実際の自分の姿を一致させることができず、結果的に自伝は失敗に終わっているとも言えるが、ピップが再び夢を見始めていることは、よりはっきりと彼の性格を表しているとも考えられるのではないだろうか。セカンド・エンディングは、自伝を書くことによって自分の人生を肯定的に意味づけようとする行為が、必然的に自己正当化という問題を孕んでいるということをより浮き彫りにしているのである。

結び

これまで見てきたように、語り手としてのピップは、間違った期待を抱いた過去から教訓を得た自分は、それを反省し、克服することで自分の成長はなされたという流れの中で自伝を展開させようとしている。しかし、マグウィッチを国外に逃がすために積極的に行動していく中でピップが精神的に成長していく第3部においても、彼はエステラに対するロマンティックな夢を持ち続けている。そういった意味で、「性急と逡巡、大胆と内気、行動と夢想(action and dreaming)が奇妙に入り混じっている、善良な男」(190) という、ハーバートのピップ評は正しい。そして、そういったピップの一面がセカンド・エンディングにおいてエステラに対し再び夢見ていることとつながりを見せていると思われるのである。

『大いなる遺産』の出版にあたり、ディケンズが『デイヴィッド・コパフィールド』を意識したのは当然のことであり、実際「無意識のうちに繰り返しに陥らないように『デイヴィッド・コパフィールド』を読み返した」ことをフォースターへの手紙の中で明かしている(Forster, 285)。ディケンズの意図した通り、この2つの作品の主人公が歩む人生は対照的であるが、語り手が自らの成長を描こうとしている点では、両者は共通している。しかし、同じ教養小説的な枠組みの中で自伝を展開させつつも、ピップの「成長」は、彼の過ちの中心にあったエステラへの未練が絡み合いながらなされる複雑なものであるという点もまた、この2つの小説の違いをより明確にしているのではないだろうか。

引用文献

- Brooks, Peter. *Reading for the Plot: Design and Intention in Narrative*. New York: A. A. Knopf, 1984.
- Buckley, Jerome Hamilton. *Season of Youth: Bildungsroman from Dickens to Golding*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1974.
- Chesterton, G. K. *Appreciations and Criticism of the World of Charles Dickens*. London: J. M. Dent, 1911.
- Dickens, Charles. *David Copperfield*. Ed. Jerome H. Buckley. New York: W. W. Norton, 1990.
- . *Great Expectations*. Ed. Edgar Rosenberg. New York: W. W. Norton, 1999.
- Forster, John. *The Life of Charles Dickens: Volume 2*. London: Dent, 1927.
- Friedman, Stanley. “Estella’s Parentage and Pip’s Persistence: The Outcome of *Great Expectations*.” *Studies in the Novel* 19.4 (1987): 410-21.

- Jordan, John O. "The Medium of *Great Expectations*." *DSA* 11 (1983): 73-89.
- Meisel, Martin. "The Ending of *Great Expectations*." *Essays in Criticism* 15 (1965): 326-31.
- Meckier, Jerome. "*Great Expectations* and *Self-Help*: Dickens Frowns on Smiles." *Journal of English and Germanic Philosophy* 100 (2001): 537-54.
- Miller, Hillis. *Charles Dickens: The World of His Novels*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1959.
- Paroissien, David. *The Companion to Great Expectations*. Mountfield: Helm Information Ltd, 2000.
- Ricks, Christopher. "*Great Expectations*" *Dickens and Twentieth Century*. Eds. John Gross and Gabriel Pearson. Toronto: U of Toronto P, 1962.
- Rosenberg, Edgar. "Writing *Great Expectations*." *Great Expectations*. Ed. Edgar Rosenberg. New York: W. W. Norton, 2000.
- Sadrin, Anny. *Great Expectations*. London: Unwin Hyman, 1988.
- Sell, Kathleen. "The Narrator's Shame: Masculine Identity in *Great Expectations*." *DSA* 26 (1998): 203-26.
- Slater, Michael. *Charles Dickens*. New Haven: Yale UP, 2009.